

## 様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成21年5月1日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2008
課題番号：19530796
研究課題名（和文）国語科教材における日本の基層文化概念の解明と活用
研究課題名（英文）Clarification and use of base-course cultural concept of Japan in language teaching material
研究代表者
藤森 裕治（FUJIMORI YUJI）
信州大学・教育学部・教授
研究者番号：00313817

研究成果の概要：以下の通り

- (1) 日本の基層文化に関する先行研究を通覧し、その論点を①自然との調和、②他律性、③言外の理解、④精神修養、⑤余韻の愛好とし、全体に通底する基層文化概念を定位した。
- (2) 学習指導要領の改善に関する研究協力者として、研究代表者の藤森は「言語文化」の定義にかかわると共に、「現代文A」「古典A」の記述内容と解説の作成・検討を担当し、本研究で得られた知見をそれらの指導内容・指導事項に反映させた。
- (3) 小学校・中学校「国語」教科書及び高等学校「国語総合」教科書における日本の基層文化概念に関する語彙・記述・論述内容を網羅し、データベース化して学会関係者に無償配布をした。これによって、新教育課程における「伝統的な言語文化」の取り扱いへの具体的な資料が整った。
- (4) 学会発表を行い、本研究の成果を公開するとともに、これらの学会誌に複数の査読付き論文を含む学術論文を発表した。査読付き論文はすべて採択されている。
- (5) アメリカ合衆国ジョージア州アトランタで開催された第53回国際読書学会において165分のシンポジウムを開催し、シンポジストとして“Literacy as Folk Culture”と題する発表を行い、高い評価を得た。
- (6) 本研究の成果に基づいて複数の著書を発行し、国語科実践研究の進展に寄与した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：日本の基層文化，教科書研究，伝統的な言語文化，古典教育，学習指導要領，民俗文化論，萬葉集研究，Literacy

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 日本の基層文化に関する議論は民族学・民俗学・古典文学研究・歴史学等、さまざまな学問分野を横断して幅広く行われてきた。これら先行研究が提示した日本人の人間観・自然観・人生観等を批判的に検討しつつ、我が国の基層文化に対して適切な認識を得ることは、改訂教育基本法に謳われている郷土を愛する心の基盤を形成するとともに、今後国際社会における役割がますます重くなっていく我々日本人の揺るぎない価値規準を自覚する上で、きわめて重要な作業である。

(2) 近年、中央教育審議会等で「言語文化」を教育することの重要性が示されている。我が国の文化伝統である古典を重視し、1000年の時を越えて伝わる日本人の精神文化を適切に学ばせようという理念を背景にして示されたものである。しかしながら、近年行われている教育課程実施状況調査

(国語)をみると、古典の学習を「嫌いだ」とする高校生は70%に達し、我が国の文化と伝統を学ぶことへの意欲は低いと言わざるを得ない。その要因の一つには受験対策に終始する指導の在り方を挙げることができるが、一方では教科書に掲載されている古典教材自体に、現代日本人に連なる基層文化がどう埋め込まれているかという問題意識の不足を指摘せざるを得ない。もとより、古典教材として定番の「万葉集」や「徒然草」、「源氏物語」等には、日本の文化伝統が豊富に見出される。しかし、こうした言語文化財はあらかじめ「古典」という教材枠に位置づけられ、ややもすると現代文とは遠く隔たった文化遺産として評価されている感が否めない。その作品にいかなる基層文化が内蔵されており、今日の国語科教材と根源的にはどうつながっているのかという視点が希薄である。

## 2. 研究の目的

本研究は、教科書を中心とした国語教材を「日本の基層文化」という視点から捉え直し、新しい国語教材の構成と内容を提示しようとするものである。そのために、本研究では、古典—現代文、文学—説明文といった従来の教材枠組みを保留する。また、国語科教材論がこれまで拠り所にしてきた国語・国文学研究に、民俗学的アプローチを導入する。さらに、社会科などの隣接教科における教材の構成と内容を視野に入れて、「国語科」「古典」といった用語概念を相対化する。

これらの研究的立場をとることによって、新時代の国語科における教材がいかにすれば日本の基層文化概念に裏付けられたものとなり、学習者自身に古今の言語文化に触れることの意義を感じさせることになるか、解明する。

## 3. 研究の方法

### (1) 日本の基層文化論に関するレビュー

藤森(2000)は、日本の民俗文化における生業論理の基礎構造を議論するとともに(藤森,2000『死と豊穡の民俗文化』,吉川弘文館)、歴史民俗博物館基盤研究「環境システムの多様性と生活世界」(2001-03年)の共同研究員として参画し、民俗学・民族学・経済学・哲学等の専門家と日本の基層文化について考究する機会を得ている。研究分担者である西一夫は、古代日本文学における日本と中国との言語文化交流について比較考察を進めている。これらの研究において取り上げられる日本の基層文化論をレビューし、学際的な整理を行う。

### (2) 国語教科書の悉皆調査

杉村・藤森(2004)では、小・中・高校における国語教科書に載録された古典文学教材の悉皆調査を実施している(杉村・藤森,2004「中学校・高等学校における中学校

・高等学校における教師の古典教育意識」、『信州大学教育学部紀要』112号,pp.73-76)。この調査で用いた方法を援用して、中学・高等学校の国語教科書に掲載された日本人論・日本文化論の悉皆調査を行い、レビューした日本の基層文化概念のうち、国語科教材に最も頻出する要素を仮指定する。その上で、平成18年版の小学校国語教科書(5社60冊)をもとに、日本の基層文化概念に関連性を有する語彙の全容を解明する。

### (3) 国語科教材に貫かれる日本の基層文化概念の解明と新しい国語教材構成の提案

如上の方法を経た上で、日本の基層文化概念として国語教科書に最も頻出する要素を特定する。これに基づき、新教育課程に対応した国語科として、中教審でいう「言語文化」の指導を具体的かつ効果的に展開し得る教材構成と内容を提案する。

## 4. 研究の成果

### (1) 日本の基層文化に関する先行研究の学際的整理

ルース・ベネディクト、加藤周一、中根千枝、土居健郎、青木保、内山節、芳賀綏、佐々木高明、大林太良らの議論を通覧し、その論点を①自然との調和、②他律性、③言外の理解、④精神修養、⑤余韻の愛好とし、全体に通底する基層文化概念を内山節の思索を参考に、複合性と多相性と定位した。この概念については、「言語文化」の指示内容を解明する手がかりとして、研究代表者の藤森が学習指導要領の改善協力者会議の席上で説明した。

### (2) 新しい教育課程への寄与

平成20年度に告示された小学校・中学校学習指導要領解説(国語編)において、「言語文化」は次のように定義されている。言語文化とは、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり文化としての言語、

また、それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活、更には、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを幅広く指している。(小学校学習指導要領解説,pp.28-29)

この定義は言語作品に特化していた従来の認識を抜本的に改めるものとなっているが、その採用にあたり、(1)における本研究のレポートが重要な資料となったという報告を、担当教科調査官より受けている。これにより、本研究の成果の少なくとも一部は、新教育課程の編成に具体的に寄与したと判断できる。また、藤森は高等学校学習指導要領(国語)の改善協力者として新科目である「古典A」「現代文A」を統括し、「言語文化」に関する課題探究型の科目としてこれらの性格と方向性を定位した。

### (3) 教科書悉皆調査の実施とデータ提供

中学校「国語」教科書(5社15冊)及び高等学校「国語総合」教科書(10社20冊)における日本文化論の記述内容を、学習指導書を参考にして網羅・分析した。その結果、(1)で整理した論点の①「自然との調和」に関する記述が圧倒的に多いことが判明した。次に、平成18年度版小学校国語教科書の全文を対象にして、季節感を示す語彙の悉皆調査を行った。この調査結果はデータベースとして大学関係者、国立国語研究所等に無償で配布した。藤女子学院大学の矢部玲子氏は、このデータベースをもとに研究発表を行っている(第116回全国大学国語教育学会,2009年5月,秋田大学)。

### (4) 新しい知見の発見と発表

国語教科書の悉皆調査から、日本の基層文化概念にかかわるいくつかの新しい発見が得られた。例えば、小学校国語教科書において最も頻出する動物語彙はキツネであり、その大半がキツネに関する民間信仰・伝承を素地とした物語教材にあること、ま

た、日本の自然美を象徴する「雪・月・花」はいずれも高い頻度で使用されているが、その実態をみると古代日本文化におけるこの概念の成立と変容とはほとんど無関係であることなどである。これらの知見は国語教育関係学会で発表すると共に、査読付き論文として採択・公刊されている。

#### (5) 国際学会での発表

本研究の成果が国際標準のリテラシーにどう貢献し得るかを確かめるため、アメリカ合衆国ジョージア州アトランタで開催された第 53 回国際読書学会 (I.R.A.) において 165 分のシンポジウムを開催し、シンポジストとして“Literacy as Folk Culture”と題する発表を行った。発表内容は、日本の基層文化概念を「民俗文化」として解題し、新指導要領で打ち出された「言語文化」の学習を Multiple Literacy といかに融合させるかという問題についての考察である。発表は研究代表者の藤森が行い、日本人発表者としては異例の 50 名超の参加者を得た。発表について参加者及び I.R.A. 理事らから高く評価され、理事レセプションに特別招待されている。

(6) 本研究の成果を学会関係者のみならず広く国語科教師に開示する手段として、複数の著書を刊行した。特に、研究分担者の西は、小学校で新たに位置づけられた「伝統的な言語文化」を具体化するため、教材ライブラリを作成・公刊している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ① 藤森裕治、小学校国語教科書におけるキツネの形象に関する民俗文化論的考察—なぜキツネが教科書に最も多く出現するのか—、読書科学 (日本読書学会)、

Vol.52、No.1、2009 年、査読有 (印刷中)

- ② 西一夫・藤森裕治、国語教科書に埋め込まれた日本文化—「雪・月・花」と季節感—、国語科教育 (全国大学国語教育学会)、第 65 集、pp.19-26、2009 年、査読有
- ③ 藤森裕治、自己組織的な学力—作業的・練習的学習が「自ら学び・自ら考える」に寄与するもの—、日本語学 (明治書院)、Vol.28-3、pp.30-39、2009 年、査読無
- ④ 西一夫、古典作品における動物の象徴性—説話文学と鳥獣戯画を通して—、信大 国語教育 (信州大学国語教育学会)、第 17 号、pp.23-32、2007 年、査読無
- ⑤ 西一夫、大学生に対する古典教育の試み、月刊国語教育研究、Vol.422、pp.46-51、2007 年、査読無
- ⑥ 西一夫、古典教育における『伊勢物語』作品研究—第 84 段「さらぬ別れ」の表現分析—、人文科教育研究 (人文科教育学会)、第 34 号、pp.11-22、2007 年、査読有

[学会発表] (計 3 件)

- ① 藤森裕治・西一夫、教科書に埋め込まれた日本文化、第 114 回全国大学国語教育学会、2008 年 5 月 31 日、茨城大学
- ② FUJIMIORI, Yuiji, Literacy as Folk Culture, International Reading Association 53'rd annual Convention, 6/May/2008, Atlanta, U.S.
- ③ 藤森裕治、小学校国語教科書の悉皆調査研究—季節に関する語彙を中心に—、第 16 回信州大学国語教育学会、2007 年 11 月 18 日、信州大学教育学部

[図書] (計 3 件)

- ① 石塚修編・西一夫他 3 名、明治図書出版、[小学校] 知っておきたい古典名作ラ

- イブラリー32 選—豊かなく伝統的な言語文化>の授業づくり—,2009年,147pp.
- ② 高木展郎編・藤森裕治他 73名,教育開発研究所,各教科等における言語活動の充実—その方策と実践事例,2008年,243pp.
- ③ 桑原隆編・藤森裕治・西一夫他 29名,東洋館出版社,新しい時代のリテラシー,2008年,405pp.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

藤森 裕治 (FUJIMORI YUJI)

信州大学・教育学部・教授

研究者番号：00313817

### (2) 研究分担者

西 一夫 (NISHI KAZUO)

信州大学・教育学部・准教授

研究者番号：20422701